

山崎弘郎先生を群馬大学での講演会に迎えて

(「**センシング技術の進歩と変革**」)

講師：**山崎 弘郎 先生**
(東京大学名誉教授)

日時:6月26日(金)15:00~17:30 会場:群馬大学工学部総合研究棟 303号室

概要:

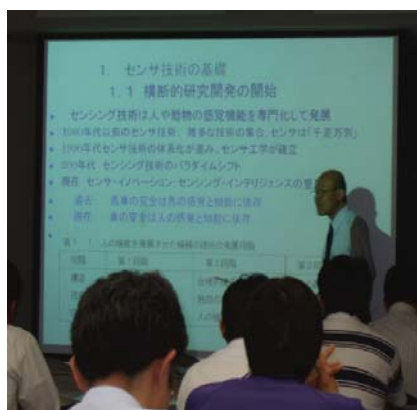
センサ技術は全体像が見えにくかったが、センサ工学、センシング技術としてまとめ、技術の構造が見えてきました。近年、応用が急拡大し、新しい価値を創出して、センサ・イノベーションと呼ばれています。この講演ではセンサ技術の体系的理解のための基礎から入り、応用の急拡大の現状を紹介し、最近の進歩が感覚の代替から感性へと進み、人間と機械とのインターフェースに向かって進んでいる現状を紹介し、

- 目的 1) センサ技術の全体像の提示。
2) センシングにおける変革とその行方を探る。

- 内容 1. センサ技術の基礎: 技術の体系と市場
2. センシングのパラダイムシフト: 計量から認識へ
3. センサ生産の革新: マイクロマシン技術
4. 感性に訴える新しい価値創造: センサ・イノベーション
5. センサにより機械が人に合わせる時代
人の意図を読むセンシング・インテリジェンス
6. センシングの未開拓領域
紫外線領域とにおける世界

主催:群馬大学アナログ集積回路研究会

共催: 群馬大学アドバンス・テクノロジー高度研究センター / ATEC、
群馬大学共同研究イノベーションセンター、応用科学学会、電気学会群馬支所



● 山崎弘郎先生のご紹介

山崎先生のご講演にさきだち、先生のご経歴を紹介させていただきます。

山崎先生は東京大学 応用物理学科をご卒業、東京大学 計数工学科教授、横河電機 常務取締役を歴任され、現在東京大学名誉教授であります。学会関係では計測自動制御学会 会長を務められ、また IEEE Fellow でもあります。

先生は皆様よくご存じの通り、計測工学、センサ工学に多大なご貢献をされてきており、この分野の学会・産業界を牽引されてきた第一人者、功労者として世界的に評価されております。

山崎先生のご考案されたものにカルマン渦流量計がございます。やや特殊な分野の技術かもしれませんが、以前オランダのデルフト工科大学の電子計測部門を訪問した際にその研究者に、「山崎先生の考案されたカルマン渦流量計を知っているか」と尋ねたところ、「もちろん知っている。面白い原理・技術と思う」という答えが返ってきたのが印象に残っております。

教育に関しましても山崎先生の薫陶を受けた教え子は日本中・世界中に何十人・何百人もおります。群馬大学大学院工学研究科にも電気電子工学科の稲村實先生を筆頭に、情報工学科の横尾英俊先生、機械システム工学科の松浦勉先生、電気電子工学科の高橋佳孝先生、伊藤直史先生、また私もその一人です。

山崎先生には10年ほど前に本学電気電子工学科および SVBL(現 ATEC)の外部評価の委員長をしていただき、また本学工学部全体の評価委員としても大変貴重なコメント・ご意見をいただいています。正直そのときには私には理解できない内容もあったのですが、何年か後にその言われている意味がようやくわかるという経験をしました。大変幅広く高い視点からのご意見に対して非常に感謝申し上げる次第です。

本日は山崎先生を群馬大学にお招きしご講演をいただきます。正直このような日がくるとは思ってもいませんでした。群馬大学の関係者一同 非常にうれしく、また大変光栄に思います。

本日は「センシング技術の進歩と変革」と題しまして、基礎的な内容から最先端まで非常に幅広いお話をさせていただきます。それではどうぞよろしくお願い申し上げます。

● 感想

学内外からたくさんの方が集まり、大盛況で会場は熱気にあふれていた。群馬大学の先生方はいつもは(難しい研究のことを考えているせいかな)硬い表情をしていることが多いように感じているが、講演会、昼食会、懇談会ではみなさん穏やかな、にこにこした表情なのが印象的であった。一緒にご講演いただいた田澤勇夫さんや地元の東京測器研究所 桐生工場長の岡野晴樹さんも和らいだ表情であった。たくさんの人たちが山崎先生に群馬大学においていただいたことを喜んでおり、山崎先生のご人徳の深さをあらためて実感した。

● 追記

社会的に非常に大きな影響力をもつ山崎弘郎先生を迎えてご講演をしていただいた。今回に限らず、私が外部の方を招聘してご講演をお願いする、産業界との共同研究を行う等の活動は基本的に私自身のレベルを上げる、研究室のレベルを上げるためである。(講演会等を社会人にも開放しているのは「共に学びましょう」の意図である。) 大学の対外的アピール等は第二義的なことである。群馬大学アナログ集積回路研究会の取材にきた新聞記者に「講演会は大学院生のために行う」と言うと怪訝そうな顔をされていたが、大いに誤解があると感じた。

虎の威を借るような意図で招聘しようとしても、名をなした一流の方々はその雰囲気を感じ取り受諾してはもらえないことが多い。次の言葉を自分自身へのいましめとしている。

いにしえの学者は己の為にし、今の学者は人の為にす。 (論語)

昔の学者は己が徳を得るために学問をしたが、今の学者は他人に知られるためにしている。学問はまず自分を高めるためにするのであって、人に認められる(地位と名声を得る)ためではない。

(群馬大学 小林春夫)